

自分の考え・感じたことを表すために必要な「表す力」をつける

「ようすや気持ちをそうぞうしながら読もう 一雨の日のおさんぼ」2年

主張点

- 1 本単元で育成する国語力をこうとらえる
出来事の順序や登場人物の気持ち・場面の様子を正しく、想像豊かに読む力
読み取ったことから自分の考えをもち、表す力
- 2 学習指導・評価のポイント
主体的に読み進めるための工夫（一人読み）
正しく豊かに読むための工夫
・「おさんぼ絵ちず」の作成
・五感を意識した読み取り
・動作化や実物を使っての追体験を用いた授業の工夫
個に応じた指導・評価の工夫
・学習中の活動の様子や発言内容の評価
・表現物（「おさんぼ絵ちず」）の評価
・学習前のアンケートと学習後の感想との変容

実践の具体

1 「出来事の順序や登場人物の気持ち・場面の様子を正しく、想像豊かに読む力」をどう育てるか

低学年の児童の読む目標は、「順序」や「場面の様子」を正しく読み取ること 「場面の様子」や「登場人物の気持ち」を想像豊かに読むことである。そのために、次のような指導を行った。

「順序」や「場面の様子」を正しく読み取るために

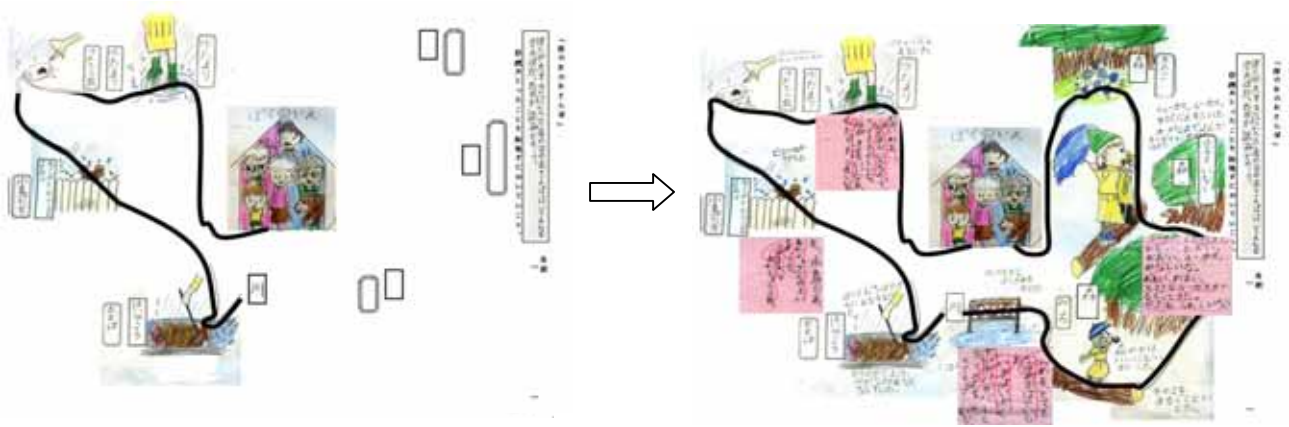
「おさんぼ絵ちず」の作成

1時間の授業ごとに「おさんぼ絵ちず」に読み取ったことを書き加える。出来事の順序、したこと・見たことの確認ができ、想像した様子や気持ちを書き加えながら進められるので、前時の振り返りができ、意欲の継続化も図れた。絵もあるのでよりいっそう楽しく取り組めた。

| | | |
|-----|------|--|
| 第1次 | 1時 | 初発の感想・学習計画 |
| | 2時 | 「おさんぼ絵ちず」を作ること、作り方を知らせる。 場面のあらすじをとらえるために出来事・場所・家族の絵をかく。 |
| 第2次 | 3～6時 | 各場面の「したこと」・・・文で書く。 「見たこと」・・・絵や言葉でかく。 「場面の様子」・・・文や言葉で書く。 想像したことを付け加える。 「ぼくの気持ち」・・・想像して付け加える。（ピンクの付箋紙） |

おさんぼ絵ちず





「場面の様子」や「登場人物の気持ち」を想像豊かに読むために
五感を意識した読み取り

教材文「雨の日のおさんぽ」は、雨の日が大好きなおばあちゃんや犬のルーカスに対して、それほどでもないぼくが、散歩を通して雨の日が大好きになっていくという内容である。おさんぽの途中、体全体でいろいろな雨の楽しさを味わえることに気付くよう、「どんな音がしているかな。」「においはどうかな。」「手ざわりは？」などと問いかけ、五感を意識させながら読み進めた。そうすることで、イメージを豊かに広げることができた。授業の最後に、「今日のおさんぽでは体のどこをつかったかな？」と問いかけ、「感じろうくん」に色をつけていった。単元の最後には、体全体で感じる事が大切なんだということに気付いた。

他の単元や他教科でも、五感をつかって、状況をとらえたり、想像したり、観察したりすることに活用できる。

感じろうくん



体のどこをつかいましたか？



「ゴボッコボツ」は耳をつかったよ！
きっと大きな音だよ。
水の流れがいきおいよくはやりからね。

感じろうくんの体にたくさん色がついたよ。体全体を使って雨の日を楽しんだね。心も楽しくなったんだね。

「ぼうきれをおとした。あっというまに・・・」
は手・目・耳・・・体をいっぱい使ったね。
目に見えないくらいはやくながれていくよ。
はしってもおいつかないよ。
ザバ、ザバー・ザーザーという音がしているよ。
水の色はにごっているから茶色だろうね。

他の単元（作文単元など）での活用
他教科での活用（生活科）

動作化や実物を使つての追体験を用いた授業の工夫

子どもたちが豊かに想像するためには、自然や人間に関する経験や体験を通して培った感性と感動する心が必要となってくる。また、経験していないことや未知の事柄については頭の中でこうではないかとイメージできる力が必要となってくる。これらの、感じたり想像したりする力を磨いたり掘り起こしたりする手助けとして、動作化・実物を使つての追体験、日常生活での体験とつなぐこと、効果音・絵や写真などの活用が、低学年ではとくに効果的であると考える。

本単元第2次第5時の「はい水こう・川・森の道」の場面は、子どもたちがイメージしにくい言葉があること、「ぼく」の気持ちや会話などが文章で書かれていないことから、より動作化や追体験などが必要である。どのような手立てが有効であるかを吟味し、指導することが重要だと考えた。

本時は、以下のような手立てで指導したが、さまざまな意見が出たり、まちがった想像に陥ったりした場合は、教科書の記述に戻り、正しく読み取れているのはどの意見かを全体で話し合ったり、教師が支援したりする必要がある。

日常生活・体験とつなぐ

「はい水こう」・「ダム」・「ぬかるみ」(子どもたちにとって身近なものではなく、イメージしにくい。)
「おさんぼ絵ちず」に描いた絵を使つたり、体験を発表し合つたりすることで、意味の理解を助けることができた。

ぬかるみは、雨がふって土がべちょべちょしていることです。



ぼくもながぐつをはいて田んぼにはいったら、ぬけなくなってこまったよ。

動作化・追体験

「ゴボツ ゴボツ」 はい水こうの様子を話し合った後、みんなで声をそろえて言うことで大きな音を表した。

「ゴボツ ゴボツ」
はい水こうに落ち葉がたまっていて、それはたくさんなので、きっと大きな音だよ。



声をそろえて
言ってみよう。

「あっという間」 ぼうきれを落とし、同時に走らせ流れの速さを体感させた。

「あっという間」
ぼうきれが流れていくのがはやいよ。
あっという間だから、すごく流れがはやいんだね。ぼくが走っても間に合わない。



かさをさして、手を広げてあるく・・・サーカスの つなわりみたい

実際にぬれた丸太を用意し歩かせることで、ぬれた丸太の感触やおばあちゃんの手な歩き方を体感した。

丸太は丸っこいから歩きにくいし、ぬれた木の上ってすべりやすいね。だから、おばあちゃんはとっても上手なんだね。
手を広げて バランスをとるとうまく歩けるね。



おばあちゃん是这样やって
おそるおそる歩いたんだね。

実物・効果音

雨の日の森の中は、いいにおい 初めてぬれた木をにおってみて感動を味わった。

ぬれた木って
いいにおい。



カブト虫のみつがある
木においがするね。

へえー 雨の森の中って
こんなにおいなんだね。

カブト虫がいそう。

川の流るる音 自分で雨の音を考えた後、CDの音を聞いて比べる。

考えたのとちょっとちが
うなあ。
このときは、どっちが近
い音だろう。



たくさん水がながれて
るし、いつもよりながれ
がはやいからきつとこ
の音よりはげしい音だ
ろうね。

このような活動を通して、場面の様子やぼくの気持ちを正しく読み取ったり、豊かに想像したりした。それを発表したり、「おさんぼ絵ちず」に書いたりして、言語化することにより、教材文の言葉以外の情報を自分の言葉に置き換えたり、言葉を用いて焦点化したり、広げたりすることができた。

「おさんぼ絵ちず」という単元をつらぬいた表現物は、最後に絵本として手元に残るので、自分だけの絵ちず、宝物になった。また、場面ごとに読み取ったことを絵や言葉で書き加え、どんどん絵ちずの内容が増えていくのも楽しみであり、意欲の継続化が図れた。

2 「読み取ったことから自分の考えをもち、表す力」をどう育てるか

自分の考えを持つとはどういうことか・・・この学習によって、個々の雨に対する認識や思いを変えることではないかと考える。これまで、雨がきらいだったり、関心がなかったりした子どもが、この学習を通して、雨の日の生き物や周りの様子について新しく知ったり、雨の日に興味を持ったり、好きになったりすることが「読み取ったことから自分の考えを持つ」ことではないだろうか。そこで、各場面の最後には、自分を「ぼく」に置き換えて、その気持ちを想像して書かせ、3人グループで感想を交流した。

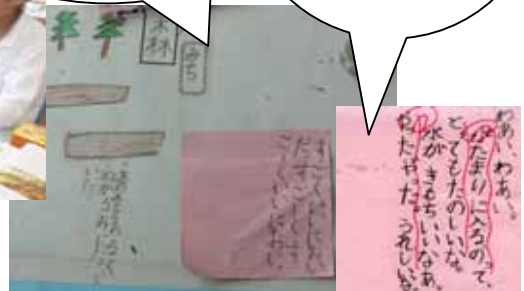
ぼくの気持ち（感想交流）



雨の日の森の中は、
さっきにおった木のお
いみたいに すごーく
いいにおいだよ。

雨がふってねれる
のはいやだったけ
ど、こんなに楽しい
ものなんだね。

学習後の感想



学習後、新しく
知ったこと、雨
を楽しむ方法、
雨を好きになっ
たことなどが書
けていました。

1で述べたように登場人物や場面の様子を動作化や追体験などで想像豊かに読み取っていったので、それぞれの場面での「ぼく」の気持ちに、豊かな読み取りが活かされていた。また、単元全体の学習が終わった後の感想には、雨に対する思いの変容が見られた。雨に対する自分の考えが広がったり、深まったりしたのではないだろうか。

3 「主体的に読み進めていく力」をどう育てるか

一人読み

一人読みの方法を定着させることにより、学習を始めるまでに、教材文を読み込めていた。

一人学習の手引き

- 一 一人「しゅうの手びき
- 二 ころにのこったことは？
- 三 あたらしいかんじれんしゅう
- 四 いみがわからないことばしらべ
- 五 たいせつなことばを見つけて
- 六 ぶんの思ったことや考えたことを書
- 七 きこもう。
- 八 あらすじを書こう。
- 九 どんな人がでてきたか書こう。
- 十 じぶんのかんそうを書こう。

初発の感想

学習への期待感が持っていました。

個に合わせた支援と評価

学習前に「雨に対する思い」「教材文に出てくる言語の理解」についてのアンケートを行い、個々の実態を把握した上で学習にのぞめた。子どもたちが知らなかったり、意味を取り違えていたりする言葉が確認でき指導に生かせるとともに、「この子どものこの体験を生かそう。」と個を生かす場を具体的に見通しを持って作ることができた。また、個に合わせた支援ができ、意欲につながった。

これらのアンケートや初発の感想と学習後の感想や「おさんぼ絵ちず」を比べることで、個々の評価に生かした。

内容・言語に関するアンケート

単元を通して主体的に読み進めるには、「学ぶ意欲」を継続しなければならない。学習前の一人読みでの教材文に対する思いや分からないことや言葉は何かを明確にしておくことが学ぶ意欲につながっていくと思われる。そのために一人読みは大変重要な役割を果たすので、その定着を図っていきたい。また、アンケートなどで個を知った上での教師サイドの確かな支援も「学ぶ意欲」を高める基になることは言うまでもない。

成果と課題

自分の考えを持つための読み取りは、教材文をいかに正しく豊かに読み取るかが重要である。そのために「一人読みの定着」「動作化・追体験・音読・絵や写真などの工夫」「表現物の工夫」を考えたが、効果的であった。

教師の教材文の解釈や言語と子どもたちの体験や想像をどうつなぐかが正しく読むことの鍵となる。

終わりに

雨不足の6月 靴箱にならんだ長靴が雨の日のおさんぽを待ちわびる子どもたちの思いを語っているようでした。